

モノがつくる社会関係：中国南京とマレー半島南部の華人婚姻儀礼にみる住宅と女性の身体

著者	櫻田 涼子
出版者	法政大学経済学部学会
雑誌名	経済志林
巻	88
号	3
ページ	137-160
発行年	2021-03-20
URL	http://doi.org/10.15002/00024140

モノがつくる社会関係

—中国南京とマレー半島南部の華人婚姻儀礼にみる 住宅と女性の身体—

櫻 田 涼 子

2000年代以降、中国都市部の公園では結婚相手を求める広告掲示板に群がる人びとをよく見かけるようになった。これは「公園相親 (*gongyuan xiangqin*)」と呼ばれる青空お見合いの様子である。ただし、お見合いとはいっても結婚する当事者は不在で「征婚启事 (*zhenghun qishi*)」と呼ばれる釣り書きや結婚相手に求める条件などを記した広告と、それを熱心に眺める親の姿が目立つ。そのため、「子どもは(結婚に)焦っていないのに焦る親たち」という見出しとともに公園に集う親の様子がメディアで紹介されるほどである。

結婚相手を求める広告の記載内容は簡潔だ。容姿を伝える写真はほとんどの場合で添えられておらず、その代わり身長や学歴、職業、月収、男性であれば持ち家の有無などが簡明直截に書かれている。例えば、「女。85年、1.64。碩士。教師。徐匯，母親公務員，父親大学教師，携帯電話番号(女性,1985年生まれ，身長164cm，大学院修士号，教員，上海市徐匯在住，母親は公務員，父親は大学教員，連絡先の携帯電話番号)」や「浙江男,1988年，1.75,本科，建築設計，月収7000元，有房有車。本人帥氣 要求：90年，1.62以上，大学本科，氣質佳。携帯電話番号(浙江省出身の男性,1988年生まれ，身長175cm，大卒，建築設計を仕事とし，月収は7000元，車と家を所有，本人はハンサム。相手に求めるのは1990年生まれ，身長162cm，

大卒、性格の良い方、連絡先の携帯電話番号)」といった具合である。

簡潔に書かれたこれらの掲示物を眺めていると、現代中国人が結婚相手に何を求めているのか、その価値観の一端が垣間見えて興味深い。なかでも特に目を引くのが男性側の広告にある住宅所有を示す記載である。「有房有車 (*youfang youche* 住宅と自家用車所有)」や「独立婚房 (*duli hunfang* 親と別居の新居)」、「漂亮婚房 (*piaoliang hunfang* 美しい新居)」など多様な表現で男性の所有財がアピールされるが、特に重視されるのは結婚後に新婚夫婦が居住する新居(婚房)が用意できるかどうかという点だろう。

漢族社会における結婚では、まだ見ぬ将来の配偶者の外見よりも(それも確かに重要ではあるだろうが)、安定した生活の拠り所となる住宅の所有が現代の結婚の決め手となる。新居の有無は、「素敵な男性と巡り逢いその後も幸せに暮らしましたとさ。めでたし、めでたし」の先にある日常生活における妻あるいは嫁の立場を輪郭のあるものにし、女性が自らの社会関係を安定化できるかどうかにかかわる重要な問題でもあるからだ。この点で住宅は「娘」として生まれた女性が「嫁」という新しい社会的立場を獲得する婚姻儀礼において不可欠な要素となるといえる。本稿では、漢族社会の婚姻儀礼において重視されるこの住宅という空間がもつ意味と儀礼過程での女性の移動する身体に着目し、新しい社会関係の創出過程を人類学的に考察することを目的とする。

モノ研究に漢族社会の婚姻儀礼を位置付ける

中国本土や台湾の漢族社会研究の領域で、特に結婚に焦点をあてた人類学的研究には分厚い蓄積があり、その内容は多岐に渡る。例えば、婚姻形態の変化、婚姻後の居住、婚姻後の家族の分節の有無、花嫁と義母の関係、婚姻儀礼で影響力をもつ母方オジの存在、娘から義理の娘へと立場が変化することの社会的な意味など、様々な視点から議論が行われてきた(Freedman 1966; Wolf 1972; Cohen 1976, 1992; Yan 1996; Judd 1989, Stafford 2000)。

例えば、ヤンは人類学の古典的研究テーマである贈与交換の理論を、中国東北部の村落社会の事例から深化させた。婚姻儀礼や葬送儀礼のみに限定することなく、日常生活のさまざまな機会にやり取りされる贈り物が、村落社会の「関係 (guanxi)」や、対人行動における規範である「人情 (renqing)」にどのようにかわるかを詳細に論じた (Yan 1996)。また、人類学のもう一つの古典的研究テーマである親族研究を新しい視座から捉えなおそうとしたカーステンの論集 *Cultures of Relatedness: New Approaches to the Study of Kinship* (2000) において、スタフォードは漢族社会の父系理念をより現実 に即したものと して再解釈を試みている。具体的には、日常的な訪問である「往来 (laiwang)」と子どもに食べさせ養育する「養 (yang)」が血縁関係だけではない関係、つながり (relatedness) を作りだすと論じた (Stafford 2000)。

このように、モノのやり取りによって社会関係が生み出される側面を掘り下げる研究は漢族社会研究においても90年代後半から盛んに行われるようになった。その一方で、人間に焦点をあてた研究を行う人類学では当然のことではあるのだが、婚姻儀礼における人間と非人間的な要素の相互交渉的関係を議論の中心にするものはさほど多くはなかった。確かに、結納や結婚式に際してやり取りされる肉類、酒、菓子などの食品や、婚房のような不動産、貴金属などの贈与品のリストとその意味について詳細に記述する物質文化研究的な民族誌は少なくない。しかし、近年日本の人類学において潮流となりつつあるモノを介して社会関係がどのように変化するかという観点 (例えば、床呂・河合 2011 など) やモノのもつマテリアリティに着目する研究、非人間をも議論の射程にいった人類学¹⁾ の視点を参照し漢族社会の婚姻儀礼を再考することは今後さらに必要な作業になっていくといえるだろう。

1) 例えば、河合洋尚は景観など非人間的な要素を議論の対象とすることで人類学の方法論や研究対象の再考を試みる景観人類学を早くから精力的に議論してきた人類学者の一人である (河合 2013, 2016, 2020)。

行為体としての「婚房」

議論に入る前に、漢族社会の婚姻儀礼でやり取りされる贈与物について簡単に確認しておくことにしよう。

他者への贈り物 (gift) を意味する「礼物 (*liwu*)」という中国語は、儀礼や贈り物、孝行や従属といった儀礼的態度を意味する「礼 (*li*)」(Weber 1968: 156-157) と、物質的モノ (material thing) を意味する「物 (*wu*)」から構成される。つまり、漢族社会における贈り物 (礼物) は物質的なモノであるだけでなく、儀礼を含む文化的規範、価値観をも包摂することがわかる。

こうした点から、ヤンは「礼」を欠いた「物」は決して贈り物にはなり得ず、ただのモノでしかないと指摘する (Yan 1996: 44)。一方、コピトフは贈り物とは対極にあるとされる商品 (commodity) であっても豊かな意味を持ちうると指摘する。コピトフによると、商品として生産されたものであっても、一度でも誰かに所有されその所有者との関係が築かれると、それはただの商品ではなく固有の経歴 (biography) を持った文化的なモノとなるという (Kopytoff 1986: 64)。この点において、現代の中国やマレーシア都市部に暮らす若者が婚房として準備する近代的な住空間は、開発業者が大量に建造した結果の味気ない画一的住空間とはならない (櫻田 2008)。それは、結婚に不可欠な財として婚姻儀礼に先立ち準備され、その空間を介して花嫁は新しい社会的立場を獲得することが可能となることからわかるだろう。花嫁は婚姻儀礼において象徴的に住宅に出入りし、日々そこで過ごすことといった関わりを持つが、住宅はこうして社会関係や人の意識に働きかけ変化をもたらす行為体となるのである。その詳細は事例を通して確認していくことにしたい。

婚房とはなにか

本稿が問題とするのは、漢族社会において「婚房 (*hunfang*)」と呼ばれ、婚姻儀礼に先立ち準備される新居あるいは新婚夫婦の部屋のことである。すでに指摘したように、結婚に際して婚房を事前に用意することは漢族社会における結婚準備として欠かせない行為のひとつとみなされている。

中国大連の大学生の結婚や出産といったライフイベントをめぐる意識を調査した李によると、「成家立業」(結婚して世帯をもつ)という漢族社会における伝統観念も影響してか、あるいは近年の急速な不動産市場の発展と銀行のローン制度の整備により住宅取得のハードルが比較的低くなっていることが影響してか、現代中国では結婚に際してマイホームが必要不可欠な条件になってきているという(李 2009: 87)²⁾。また、ジャービスは『人民日報』に掲載された1歳の息子の将来の結婚のために新居(新房)を建てた両親を描いた風刺画を紹介しつつ、1980年代以降の中国の急速な経済発展に伴い加速する婚房市場が比較的新しい現象であると指摘している(Jervis 2005: 225)。

筆者が2010年8月に南京市で結婚を間近に控えた男性に対し行ったインタビューでも、婚房の有無が結婚を成立させる上で極めて重要な条件となることが示された(Sakurada 2011)。すでに述べたように、中国都市部の公園で開催される当事者不在の「公園相親」で貼りだされる広告に最も目立つように書かれるのは男性側の住宅所有の有無であったが、南京のような大都市で農村戸籍の地方出身者の男性が都市戸籍を持つ南京出身の女性との結婚を希望する場合、婚房はその結婚を成立させる上で重要な要因となるという(Sakurada 2011: 18)。

2) 李が2006、2007年に大連市の大学生を対象に実施した調査によると、結婚する際に重視するのは「安定する仕事」(40.4%)、「マイホームが持てる」(35.7%)、「相手の年収」(31.1%)であった(李 2009: 83)。男性は女性より「マイホームが持てる」かどうかを重視する傾向がみられたという(李 2009: 82-83)。

一方、これまで筆者が調査を行ってきたマレーシアの華人社会の事例から明らかになったのは、結婚は家における最も重要なライフイベントであり、婚姻儀礼を逆算して住宅の改造（つまり長期的にみた婚房の準備）が開始されたという点と、婚房を通して、よそ者としての女性は「家」に居場所を獲得し承認されるという点であった。つまり、婚姻儀礼とは空間を介し娘としての女性を生家から切り離した上で、嫁としての新しい社会的属性が付与される家への参入儀礼としての側面も認められるのである（櫻田 2008）。

このようにして、婚房は漢族社会の婚姻儀礼において重要な意味を付与された物質的な財であり、社会空間であることが分かる。新しい関係を創出する社会空間としての側面に着目し、中国とマレーシアの漢族婚姻儀礼の事例から空間と身体の関係についてみていこう。

調査について

本稿では、中国南京市とマレー半島南部に位置するジョホール州の福建系華人の婚姻儀礼を取り上げる。

南京の婚姻儀礼は2010年8月に、マレーシア華人の婚姻儀礼は2001年8月に参与観察を行った。筆者は、2001年からマレーシア・ジョホール州の住宅団地の華人家族と共に暮らし調査を行ってきた。この住宅団地には、2001年から継続的に訪問し、ここで取り上げる新婚カップルに子どもが誕生し、子どもたちが父方、母方祖父母にそれぞれ養育され、夫婦が高い賃金を求めて都市部へ移住することで生じた問題や家族の変化を家族のような気持ちで心配し、共感してきた。そのため、短期滞在中に参与観察の機会を得た南京での調査は、マレーシアのそれと比べるとインフォーマントとのラポールは十分に作られていないという問題がある。その結果、それぞれの事例の奥行きには差異があるかもしれないが、二つの社会を比較することでより空間が社会関係を作るプロセスが明確になるだろう。

以降のセクションでは、①婚姻儀礼に先立ち準備される婚房の使われ方と、②婚姻儀礼当日の一連の儀礼プロセス（特に婚房での身体の動き）の二点に焦点をあて事例を確認したい。

中国都市部・南京市の新婚夫婦の事例

安徽省出身の新郎Zは安徽省の理工大学を卒業後、南京市の企業に就職した。南京市出身の新婦Cは市内の理系大学を卒業した後に就職した企業でZに出会ったという。その後、それぞれが転職し、現在ZはIT系企業に勤めていて月収は約8,300元（約103,750円）³⁾である。Cは化学貿易関連の企業に勤め、月収は約2,000元（約25,000円）である。二人は1986年生まれで、調査を行った2010年時点で24歳だった。出会って1年後の2009年に二人は婚約し、2010年に「訂婚（*dinghun*）」と呼ばれる婚約のため財の交換を行った。結納の「彩礼（*caili*）」では新郎から新婦へ10,001元（約13万円）が贈られた。この額は「一万人の中からあなたを選んだ」という意味があるという。新郎側から新婦への礼物は、たばこ数箱、酒、飴と茶葉だった。一方、新婦から新郎へ贈る嫁入り道具「嫁妝（*jiazhuang*）」は液晶テレビ、冷蔵庫といった電化製品、食卓セット、ベッド、タンスなどの家具家電一式だった。

2010年8月8日：「婚房」の準備

2010年8月8日、すでに「訂婚礼」はその前週に済ませていた二人が婚房で婚姻儀礼当日の細かい準備をするというので二人の新居を訪ねた。

二人の婚房は、南京市郊外に文教地区として開発された新興住宅地仙林地区のなかでも特に目を引くモダンな共同住宅「公寓（*gongyu*）」⁴⁾である。

3) 人民元を日本円に換算した金額は2010年8月時点の為替レートに基づくものである。

2LDK（「兩室一庁（*liangshi yiting*）」で広さ57㎡の婚房は夫婦が共同で購入し、価格は580,000元（約725万円）だったという⁵⁾。訪問した当時はまだ婚姻儀礼を20日後に控えていたため、婚房には新郎Zのみが居住していた。新婦Cは8月28日の婚姻儀礼が終了するまでは南京市の実家に暮らし、婚約者であるZとは同居しないとのことであった。しかし、この日は新婦の嫁入り道具の液晶テレビの配線工事の立会いのために婚房にやってきた。それだけではなく、結婚披露宴「婚宴（*hunyan*）」で配る「喜糖（*xitang*）」⁶⁾の用意をするために市内の実家から1時間かけて郊外の婚房に來た。

喜糖の準備が終わると、二人は作成予定の結婚写真アルバムや結婚披露宴の宴会場に設置する予定の写真パネルなどを見せてくれた。婚宴まで残すところ20日間になったがすでに用意はほとんど終わったという。新婦Cによると、残された作業といえば、婚姻儀礼当日に二人の間に早いうちに子どもが生まれることを願って（「早生貴子（*zaoshengguizi*）」）寝室のベッドの中に入れる棗（*zao*）、落花生（「花生（*huasheng*）」）、龍眼（「桂円（*guiyuan*）」）、蓮の実（「蓮子（*lianzi*）」）を準備するくらいだろうと言った（図1参照）。

4) このアパートは2010年5月に完成したデザイナーズマンションで、日本の無印良品に影響を受けた中国人建築士が設計したものだ。コンクリート打ちっぱなしの外壁に黒やシルバーの建材が硬質なイメージを作りだし、そこに赤の刺し色が映える洒落た作りで、205戸の分譲住宅には多くの若い夫婦が居住していた。

5) 夫婦によると、住宅購入のために銀行の住宅ローン（ローン金利は3.7%）を30年で組んでいるが、10年で完済する予定であるという。月々の返済額は2,100元（約26,250円）だが、自己負担しているのは1,200元で、会社の公積金からの補助が900元だという。ちなみにローンの負担割合は新郎Zが60%強、新婦Cが40%弱とのことだった。

6) 二人が用意した「喜糖」は包装資材店で買ってきた八角形の赤い小箱にミルクキャンディを6個ずつ詰めたものである。箱を折るところから全ての作業を二人で行った。



図 1：婚房の寝室

2010年 8 月28日：婚姻儀礼

二人の婚姻儀礼は「八字 (*bazi*)」⁷⁾ を見てもらった結果、2010年 8 月28日 中午11点28分に行うのが良いとされたという。この日、早朝に新郎が新婦の家に迎えに 出向く「親迎 (*yingqin*)」と、親に対する孝を示し感謝を伝える「敬茶 (*jingcha*)」を行った。

午前 6 時前、南京市の中央門地区の新婦の自宅には、すでにウェディングドレスを着た新婦とその父母、カメラマン 2 名、化粧担当 1 名、伴娘 (*banniang*) と呼ばれる付き添いの友人 1 名、新婦の友人 1 名が化粧などの準備で忙しく立ち回っていた。

7 時を過ぎたころ、新婦のおバ (母方オジの妻) と母方イトコが到着した。その後、ビデオカメラマンの男性がやって来て準備に余念のない新婦を被写体に撮影の準備を始めた。母親は、伴娘や姪 (新婦Cの母方イトコ)、そして調査と称して突然やってきた私たちに八宝粥を食べよう勧めた。

7) 出生の年・月・日・時間の4項目を十干と十二支の2字ずつで表わした8字のことで、これを根拠とし結婚相手との相性や結婚式の日取りを決める。

落ち着かない様子の父親は外へ出ていくと、手にたくさんの饅頭を抱えて帰宅し、それを食べるようみなに勧めた。新婦が父母と3人で住む住宅は2DKの間取り、40㎡ほどの広さの集合住宅である。食堂に皆が集まると部屋は人でいっぱいとなり大変賑やかだった（図2参照）。

新婦Cは夕方から行われる婚宴の進行表を見ながら髪の設定とメイクをしてもらっていた。そのうちに伴娘は新婦と念入りに相談しながら新婦の靴の隠し場所を探し始めた。片方は食堂の電子レンジの中に隠し、もう片方は新婦の部屋に隠すことにした。

7時20分、新郎が到着した。新婦の友人と室内にいたカメラマン、ビデオカメラマンらがアパートの下まで降りて新郎側の様子を確認し、友人はその様子を伴娘に報告した。アパート1階に新郎たちが到着すると用意していた爆竹を3分以上鳴らした。新郎、伴郎、カメラマンが2階にある新婦の家の玄関前に到着したタイミングで、新婦は大急ぎで自室に入り鍵をかけてしまった。玄関の外から新郎と伴郎が「ドアを開けて！（開門 kaimen!）」と叫ぶ。何度かの押し問答の末、たくさん用意してきた「紅包（hongbao）」（赤い封筒に紙幣をいれたもの）を扉を開けてもらうための



図2：化粧をする新婦とそれを見守る家族と友人

賄賂として鉄門の隙間から伴娘や新婦の友人たちに手渡し、ようやく家の中に入ることが許された。しかし、それで終わりではない。次は新婦や伴娘、友人、イトコたち若い女性が扉の鍵を閉め立てこもる部屋の扉を開けなければならない。

伴娘は新郎に対し、新婦を愛する11の理由を説明せよと要求する。それが済むと、愛している！と三回大声で叫ぶこと、愛の歌を歌うことといった要求を新郎に突きつける。新郎に付き添う伴郎は、部屋の外にいる新婦の母親やオバなどにも紅包を配り、新婦が扉を開けるよう説得して欲しいと懇願する。最終的には扉の上の隙間から大量の紅包を投げ入れ、やっこのことで新婦が隠れていた部屋の扉が開き、新郎はこの日初めて新婦と対面することが出来た。

7時45分、ビデオカメラマンの男性の指示で食堂のテーブルが片付けられ、椅子が二つ置かれた。新婦の父母が座る位置をビデオカメラマンが細かく指示し、婚姻儀礼のなかでも特に形式的に行われる「敬茶（jingcha）」の準備が始まった。壁を背にして座れるように置かれた椅子に新婦の両親が座り、それに相対する新郎新婦は床に跪いた。全ての手順はカメラマンが細かく指示する。まず一杯目の茶は新郎から新婦の父へ渡す。そして二杯目の茶は新婦から新郎へ手渡され、その後新郎が新婦の母へ手渡した。この時、新郎は初めて新婦の両親を「お父さん、お母さん（爸爸媽媽 babamama）」と呼んだという。その後、新婦の父が娘に紅包を渡し、新婦の母が新郎に紅包を渡した。この時、新郎は「お母さん、ありがとう（謝謝媽 xiexiema）」と呟いた。

7時52分、新郎新婦は互いに八宝粥を食べさせあった。ビデオカメラマンの指示で新郎は粥の中から棗を探し出し、新婦に棗を食べさせると、新婦は棗の種を新郎の手のひらに吐き出す儀礼を行った。その後、新郎と新婦は八宝粥の中から蓮の実を探し、互いに食べさせあった。棗と蓮の実の子宝に恵まれることの象徴である。

7時55分、新郎は新婦を実家から連れ出すために新婦が伴娘と協力して

家の中に隠した靴を探し始めた。靴が見つからない限り家の外に新婦連れ出すことはできないのだという。新郎は伴郎たちとどこに靴が隠されているのか大きな声で尋ねながら家中を探しまわった。そうしているうちに、ついに新婦の部屋のベッドの下に片方、それから電子レンジの中からもう片方の靴を探しあてた。靴を発見したことで、新郎たちはようやく新婦をこの家から連れ出すことが出来る。新婦によると、婚姻儀礼で家を離れる新婦は、本来であれば裸足のまま足を地面につけないようにするため父親に背負われて実家から婚房に向かうものだという。しかし、娘を背負ってアパートの狭い階段を下りるのは年老いた父には難しいという理由で、新婦はビーチサンダルを履き、父に手を引かれて実家を出発した。ウェディングドレスに合わせて用意した白い靴を履いて歩くと地面に足をつけたことになるので、ビーチサンダルを履くのだという。

路地の奥のアパートから表の通り出たところに新郎がこの日のために用意した「婚車 (hunché)」が駐車してある。婚車とは迎親のために用いる自動車のことで、新郎は事前に高級外国車を所有する友人に依頼し、当日にこの車を婚車として運転してもらうことにしていた。父親に手を引かれて婚車まで連れてこられた新婦は、そこで新郎に引き取られ、車の後部座席に乗る時にビーチサンダルを脱いで、夫となる新郎が探し当てたあの靴を履かせてもらった。親迎と敬茶を済ませた新婦の、靴を履かずに家を離れるその足が示すように、家族から切り離され、どこにも所属していない状態で新しい所属先に新婦の身体は移動する。8時10分、こうしてようやく5台の婚車が婚房に向けて出発した。

8時50分、車は婚房に到着した。先に到着した新郎の友人たちがアパートのゲート付近で爆竹を鳴らし二人を迎えた。新郎は車から降りると新婦を背負い、普段ならアパートのエレベーターを使うところを、この日は汗をかきながら階段を一步一步登った。ここでもやはり足を地面につけないようにして婚房に向かうのだという。新郎は新婦を背負い靴のまま婚房に入ると、寝室に直行しベッドの上に新婦を降ろした。その後、新郎の兄夫

婦が彼らの幼い息子連れて婚房の寝室に入ると、子どもをベッドの上に転がした。これもまた早いうちに子どもに恵まれるよう行う象徴的行為である。婚房には、朝の儀礼を指示し撮影していたカメラマンたちがついてきて、ここでも新郎新婦はオイと一緒に写真を撮影した。

9時10分、再びビデオカメラマンの男性の指示により敬茶の準備が始まった。すでに婚房では安徽省からやって来た新郎の両親が息子夫婦の到着を待っていた。今度は、新郎の両親がソファに座りその両親に対面し跪いた新郎新婦によって敬茶が行われた。新婦はまず新郎の父に茶杯を渡す。そして新郎がもう一つの茶杯を新婦に渡すとその茶杯を彼女が新郎の母に渡した。その後父が胸ポケットから紅包を二つ取り出し一つを妻に渡すと、父は新婦に、母は息子である新郎にそれぞれの紅包を渡した。

9時13分、結婚アルバム用の写真撮影が開始され、新郎新婦は寝室に移動し様々なポーズで写真を撮影した。その一連の流れの中に再び八宝粥を食べるという行為があり、新郎の兄嫁によって準備された粥は寝室に運ばれると、新婦の実家で行われたのと同様に棗と蓮の実を互いに食べさせあった。その後、新婦の家から二人の新居へと移動して来た友人たちに一通り婚房を案内すると、2時間後に迫った披露宴のためにそれぞれが慌ただしく再び移動準備を始めた。

マレーシア・ジョホール州のカップルの事例

1997年～1999年：同棲から法的結婚へ

1975年生まれの福建系華人Jは、1994年に仕事を求めてジョホール州北部にある実家を離れ、シンガポールの対岸にあるジョホールバルに暮らしシンガポールで働くようになった。中学時代から付き合いのあった女性Aは1979年生まれの福建系華人である。彼女はJと同じ住宅団地に住んでいた。小さい頃から彼女の兄とJの仲が良かったこともあり、兄とJがジョホールバルで共同生活を送るようになると度々訪れるようになり、そのうちにA

もジョホールバルのアパートに合流し共に暮らすことになった。

1999年、二人はジョホールバルの福建会館に婚姻登録し法的な夫婦となった。しかし、伝統的婚姻儀礼と披露宴を行っていなかったため、二人は周囲からは正式な夫婦としては認められていなかった。そのため、ジョホールバルでは二人は共に暮らすことが出来たが、二人の故郷の町に帰省した際には、それぞれが自分の実家に帰り別々に過ごしていた。正月のための帰省であってもAが夫Jの実家の寝室に入ることは恥ずべき行為として禁じられており、妻であるAは夫の実家を訪問しても、夫の実家のホールやテラスなどの他の家族の目がある場所で過ごすことがほとんどだった。

2001年9月17日：訂婚礼と婚房の準備

婚姻儀礼2週間前のこの日、婚約の儀礼「訂婚礼 (*dinhunli*)」が行われた。この日のために遠方からやってきた新郎Jの父方オバが儀礼的に媒酌人の役割を務め、婚宴の招待状や豚足、豚肉、結納金をおさめた三段かごを持参し、新婦Aの実家を訪れた (図3 参照)。



図3：新郎から新婦へ贈られた物

その後、新婦は紅包、サトイモの苗、黒砂糖、生姜、炭、香水2瓶、かんざし、白布2枚、硬貨、小豆と緑豆と粳付き米の入った小さなジップロックを新郎に贈った。サトイモの苗や穀物は土に埋めて育つ繁栄の象徴であり、将来に渡って新婦が食べることに困らぬようにとの願いが込められているという。また、炭は幸せな家庭生活を送るための炉の象徴として持参させるという。

婚約儀礼の夜、新婦は新郎の実家を訪れた。婚姻儀礼の前に模様替えをし婚房として準備した2階の主寝室に赤いタライ、シーツ、シールなどを置いたためだ。赤いタライは子孫繁栄の象徴であり、マレーシア華人の結婚の際に新婚夫婦の部屋に用意されるのが一般的である。

2階の部屋は伝統的な婚姻儀礼の準備が始まるまでは新郎の両親が寝室として使用していた。しかし、長男である息子の結婚に際し表通りから太陽光が直接入り込み、かつ祖先の位牌や祭壇が置かれたホールの真上に位置する部屋が新婚夫婦の部屋として使われることになった。事前に新郎と父が片付けを行い、新郎側が用意した新しい婚礼家具が運び込まれた。ダブルベッドは部屋の中央に、鏡台は窓際に、北側には衣装ダンスを置いた(図4参照)。



図4：婚房の様子

婚約儀礼の翌日は、新郎Jと父方オバが「安床（anchuang）」の儀礼を行った。安床は夫婦が末長く仲良く過ごし、早いうちに子どもが生まれることを願って床（ベッド）の上で行われるものである。この儀礼が行われている間、新婦はそこにいてはいけないとされるため、新婦Aは参加を許されなかった。また安床を行った部屋は特別な空間と見なされ、婚姻儀礼が滞りなく終わるまでは新郎新婦以外がこの部屋に入室することは禁止された。特にベッドに触れることが禁止された。また喪中の者、妊娠している者、月経中の女性が近づくことは固く禁じられるという。調査者としてこの家に以前から滞在していた筆者は、婚房に模様替えされる前の部屋では家族と一緒に雑魚寝をしていたため、何も考えずにこの部屋に入ろうとしたところ、新郎の妹に扉を触ってはいけないし、決して中には入ってはいけないと注意された。

2001年9月30日：婚姻儀礼

婚姻儀礼当日、新郎Jはまだあたりが薄暗い6時前に起床し水を浴びた後、父に教えられた通りに祖先の位牌と祭壇の神々に拝礼し、線香を供えた。9時前、母方オジの知人男性が運転する婚車に乗り込み、母方イトコらと共に3台の車列で新婦の自宅へ向かった。迎親には新郎側の女性親族は同行しない。婚姻儀礼が終わる前に夫方の女性親族が新婦側の家に行くことは女性同士の気がぶつかり合うためよくないことだとされ忌避される。

大音量のクラクションと共に新婦Aの家に着くと、Aの末弟が新郎Jの乗った婚車のドアを開けて新郎一行を家へ迎え入れた。新婦Aは、すでに姉とその子供たち、弟そして友人を引き連れ2階の部屋に立てこもっていた。マレーシア華人社会でも中国都市部の迎親同様、新婦を迎えるためには新婦側から「チリソースの瓶を一気飲みしろ」や「その場で踊れ！」あるいは「大声で歌え」といった無理難題がつきつけられた。「ドアを開け

るといいことがあるよ！」と扉の外側からは新郎のイトコの男たちが叫ぶと、室内からは子どもたちの「紅包を頂戴な！」という高い声が帰って来る。

しばらくの押し問答の後に新郎たちが中に入ると、ウェディングドレスを着た新婦Aの前には仁王立ちした新婦の姉が立ち、新郎の愛情を確認する質問が繰り返された。質問に答え、子どもたちにたくさんの紅包を握らせて初めて新郎は新婦に近づくことが許された。

二人はそろって階下に降りると、ホールの祭壇前に置かれた真っ赤に焼かれた炭を跨ぎ一度外へ出た。その後テラスの炭は下げられ、新郎新婦はテラスに祀られた天官を拝むと、ホールに戻り祭壇の祖先を拝むと迎親は終了した。しばらく新婦の実家で冷たい飲みものを飲みながら新婦の家族と新郎は談笑した後、新婦を婚車に乗せて出発した。

二人の実家は同じ住宅団地の徒歩5分の距離にある。車で移動すれば2分とかからない。しかし新婦を乗せて彼女の実家から離れる車はあえて住宅地の外の通りを遠回りし、しばらくすると住宅団地に戻ってきた。これは一度実家から切り離された新婦は元の場所に戻ることができないことを覚悟させるため、帰り道がわからなくなるように同じ道を何度もぐるぐると迂回しながら遠くまで走るのだという。

新婦を連れて新郎がようやく自宅に戻ると、花嫁の到着を待ち構えていた新郎側の親戚や近所の人びとが爆竹を打ち鳴らして彼女を迎え入れた。婚車から降りた新婦Aは、住宅の中と外の境界に置かれた赤く燃える炭を新郎Jに支えられながら跨いで家の中に入った。この炭を置く位置をどこにするかは、新郎の母と姉が事前に念入りに確認し、婚姻儀礼当日の朝に用意した生米と茶葉を混ぜたものを炭の上に掛けた。

家の中に入った新婦Aはまず2階の婚房に向かった。これは「進房(jinhun)」とよばれる。そのあとを追いかけてきたAの女友だちも一緒に2階へあがっていった。初めて友人たちに自分の部屋を見せることができると本当に嬉しいと彼女は言った。その間、1階のホールでは敬茶の準備が始

まった。2階から降りてきた新郎新婦は、新郎の父と祖母に手順を教わり繰り返し練習し、正午から儀礼が開始された。祭壇に向かって右側が男性の位置であり、台所に通じる祭壇の右端には新郎の父方オバと姉が茶の準備を行った。姉が注いだ茶は父方オバに手渡され、その後父方オバから新郎新婦に茶が渡された。まず新郎の父の教えを受けながら、新郎新婦は祖先の位牌に拝礼し、新郎は茶杯から少量の茶を床にこぼした。その後は年長順に交替で祭壇前に用意された椅子に座る年長者に茶を捧げた（図5参照）。

敬茶は、まず新郎が男性側（父あるいはオジ）に茶を渡し男性が茶を飲むと紅包を新郎に渡す。次に新婦が男性側に茶を渡し男性が茶を飲むと紅包を新婦に渡した。その後も同様に、新郎と女性側（母あるいはオバ）、次に新婦と女性側という組み合わせで茶と紅包がやり取りされる。この手順で①父方祖母と父方オバ、②父方オジ夫婦、③父母、④母方祖母、⑤母方オジ夫婦、⑥母方オジ夫婦、⑦未婚の姉の順に行われた。

年長者に対する敬茶が一通り終わると、今度は新郎新婦が祭壇の前の椅子に座り、新郎の妹が二人に対して敬茶を行った。茶を渡し終わると新婦Aが新郎の妹に対し紅包を渡した。



図5：敬茶のために祭壇前に座る新郎の両親（左）と茶を捧げる新郎新婦（右）

ディスカッション

ここまで中国南京とマレーシア華人社会の漢族カップルの婚姻儀礼を概観した。ここに共通してみられたのは以下の点であった。

- ① 婚房は婚姻儀礼が完了しない限り新婦の空間にはならない
- ② 婚姻儀礼のクライマックスは新婦をその実家から切り離し、婚房に迎え入れるプロセスである

本稿で示した事例からは、よそ者である女性を新しい家の成員にするために婚房という特別な空間を用意することが示された。このことから、婚房さえ用意すれば実家から切り離された娘が新しい立場を獲得し自らを紐づけられるように思われるかもしれない。しかし、実際には婚房は婚姻儀礼を行わない限り新婦が自由に出入りしたり、自らが所有する空間として自由に振る舞うことはできないことが明らかとなった。ここから示されるのは、婚房はそこにただ存在するだけでは新しい社会関係をもたらす何かには成り得ず、移動する身体によって新しい関係が象徴的に経験されて初めて身体と共鳴し経験される空間となるという点である。

空間と身体

空間（そして場所）と身体の関係は様々な分野から議論されてきたが、特に現象学や人文地理学の分野において広く議論されてきた。例えばフッサールは、身体は「間接的にこの運動の内に共一局所化される」ものとして空間を通して運動することを明らかにした（ケーシー 2008: 295）。ここで問題とされるのは、諸々の場所の横断を通して空間内を移動するという点、つまり動くことにより有機体としての身体は一つになり、動くことによって空間と関係を結ぶことが出来るという点である。このことをフッサールは「運動感覚的働きと空間的運動は連合によって合一している」としているが、有機的な身体をもつ私が動くことにより、環境世界と身体は統

一化される（ケーシー 2008: 297）。フッサールによる身体的志向性をさらに先鋭化させたのはメルロ＝ポンティである。メルロ＝ポンティは『知覚の現象学1』において身体の運動こそが空間を生み出すもの（「空間の産出者」）であることを示している（メルロ＝ポンティ1967）。メルロ＝ポンティにとって空間の起源となっているのは、人間に固有の身体の客観的な場所移動のことではなく、むしろそうした運動の経験そのもののことである⁸⁾。

本稿では、これらの議論のなかでも特に「空間の産出者」としての身体の動きに着目し、婚姻儀礼における女性の身体を確認したい。すでに述べたように漢族社会では婚姻に先立ち婚房という空間の準備が行われる。つまり空間を用意することは新しい社会関係を結ぶ際には必要不可欠な準備となる。しかし「空間」を用意するだけでは新しい社会関係はもたらされない。空間は、移動する身体を伴って新しい関係が象徴的に経験されてはじめて身体と共鳴する空間となる（そしてそれは固有の場所となる）。

迎親では、自らの家族に守られ自室に隠れ婚房に連れて行かれることに抵抗した娘は、外からの呼びかけに反応し部屋を出た瞬間に古い関係から切り離され始める。

南京市の事例の〈新郎に見つからないように隠された新婦の靴〉は、娘とその出自である生家を結びつける細い結び目でもあった。しかし靴はあっけなく新郎に発見され、完全に生家から切り離された娘の身体は、裸足のまま、どこにも所屬しない状態で婚房に移動する。どこにも足をつけていないまっさらな状態の娘の身体は、新郎に背負われて新しい所屬先に着地した。婚房の寝室のベッドに降ろされ新郎のオイを抱えて写真撮影をされるその瞬間に、古い関係から切り離され新しい関係を取り結ぶ。

8) メルロ＝ポンティの身体議論によって、空間の普遍性から場所の特殊性を回復させようとする近代後期の努力は最高度に達したという（ケーシー 2008: 314）。しかし、本稿では普遍的で近代的な特徴をもつ空間がいかにして固有の場所となっていくのかという点については議論しない。

マレーシアの事例で示された新婦の身体もまた赤く燃える炭を跨いで越え、生家の内から外へ踏み出したことにより古い関係から切り離される。そして、彼女の身体は元の場所には戻れない象徴的移動を経験し、戻る場所を完全に失った形で新しい空間に取り込まれる。そこでは再び燃える炭を跨ぐ必要がある。こうして、生家の「炉」から婚家の「炉」へと彼女の身体は移動し、新しい社会関係が創出される。

ここで注意したいのは、マレーシア華人の婚房の準備の過程で確認したように、新しく婚房が準備できない場合は部屋の使用者を交替し、模様替えることで婚房を用意することができる。しかし、生活の痕跡が残るその空間は、儀礼を行うことにより改めて無化する必要がある。つまり両親の部屋として使用されていた寝室を新郎新婦の婚房に変更するためには、身体の移動を禁止（ここでは「新婦が儀礼に参加すること」、「他の女性が安床後の部屋に入ること」、「不浄とされる人が近づくこと」の禁止）することにより、一度空間をゼロの状態にする必要があった。そうして初めて儀礼と身体の移動を伴った時に新しい社会関係を生み出す原動力を持った空間になる。つまり婚房という空間を介し実践される婚姻儀礼とは、空間を一度無化し、身体の移動により主体に変化を経験させ、そして新しい社会関係を生み出すものであるといえるだろう。

おわりに

本稿では、漢族社会において婚姻儀礼の実施に先立ち準備される婚房を介して女性が娘から嫁という新しい属性を獲得することに着目し、婚姻儀礼とは婚房というモノをめぐる女性の身体が古い関係から切り離され、そして新しい関係へ接合されるという新しい社会関係が創出される出来事であることを示した。

移動する身体によって婚房という空（void）の空間は新郎新婦を結びつける空間へと変化する。つまり移動する身体こそが空間を生み出すもので

あり、成員に新しい社会関係を経験させるそのものであるのだ。

本研究の南京調査は、日本学術振興会「組織的な若手研究員等海外派遣プログラム（大航海プログラム）」による「京都エラスムス計画:持続的社会発展に向けた次世代アジア共同研究リーダー育成（2010年度）」および京都大学GCOE「親密圏と公共圏の再編成をめざすアジア拠点」, 京都大学人文科学研究所附属現代中国研究センターから経費の助成を受けた。南京滞在中は、南京大学社会学院社会人類学研究所の楊徳睿先生に大変お世話になった。また、マレーシアでの調査を可能にくださったマレーシアの友人にお礼を申し上げる。

参考文献

- ケーシー, エドワード (江川隆男・堂園俊彦・大崎晴美・宮川弘美・井原健一郎訳) (2008 (1996)) 『場所の運命—哲学における隠された歴史』新曜社。
- Cohen, Myron L. (1976) *House United, House Divided: The Chinese Family in Taiwan*. New York: Columbia University Press.
- Cohen, Myron L. (1992) “Family Management and Family Division in Contemporary Rural China” *The China Quarterly* 130: 357-377.
- Freedman, Maurice (1966) *Chinese Lineage and Society: Fukien and Kwangtung*. London: Athlone Press.
- Jervis, Nancy (2005) “The Meaning of Jia: An Introduction” Knapp, Ronald. G. and Kai-Yin Lo (eds.), *House Home Family: Living and Being Chinese*, pp.223-233, Honolulu: University of Hawai'i Press.
- Judd, Ellen E. (1989) “*Niangjia*: Chinese Women and their Natal Families.” *The Journal of Asian Studies* 48(3): 525-544.
- 河合洋尚 (2013) 『景観人類学の課題—中国広州における都市環境の表象と再生』東京：風響社。
- 河合洋尚 (2016) 『景観人類学—身体・政治・マテリアリティ』東京：時潮社。
- 河合洋尚 (2020) 『景観人類学入門』東京：風響社。
- Kopytoff, Igor (1986) “The Cultural Biography of Things: Commoditization as Process.” In Appadurai, Arjun (ed.), *The Social Life of Things: Commodities in Cultural Perspective*, pp.64-91, Cambridge: Cambridge University Press.

- 李東輝 (2009) 「中国大学生のライフイベント観に関する一考察—「結婚」と「出産」を中心に」『奈良女子大学社会学論集』(16): 77-93.
- メルロ＝ポンティ, モーリス (竹内芳郎・小木貞孝訳) (1967 (1945)) 『知覚の現象学1』みすず書房。
- Sakurada, Ryoko (2011) "Social Relations of Marriage and House" In Hirai, Meari and Taisho Nakayama (eds.), *The Reports of the Intensive Social Research Program on Chinese Society of Kyoto Erasmus Project, 2010* (京都エラスムス計画2010年度中国社会研究短期集中プログラム報告書: 南京市・江蘇省南部の都市と農村) pp.9-19. 京都大学大学院経済学研究科「京都エラスムス計画」事務局・京都大学人文科学研究所附属現代中国研究センター。
- 櫻田涼子2008 「「家」を生きる: マレーシア華人社会における関係の諸相」『華僑華人研究』5: 69-93.
- Stafford, Charles (2000) "Chinese Patriline and the Cycles of *yang* and *laiwang*." In Carsten, Janet (ed.), *Cultures of Relatedness: New Approaches to the Study of Kinship*, pp.37-54, Cambridge: Cambridge University Press.
- 床呂郁哉・河合香吏 (編) 2011 『ものの人類学』京都: 京都大学学術出版会。
- Yan, Yunxiang (1996) *The Flow of Gifts: Reciprocity and Social Networks in a Chinese Village*. Stanford: Stanford University Press.
- Weber, Max (1968) *The Religion of China: Confucianism and Taoism*. Trans. Hans Gerth. New York: Free Press.
- Wolf, Margery. (1972) *Women and the Family in Rural Taiwan*. Stanford: Stanford University Press.

Crafting Social Relations:
A House as a Material Thing and Moving the Body of
a Chinese Bride

Ryoko SAKURADA

《Abstract》

Drawing from *hunfang* (婚房), the practice of preparing a new house upon the wedding of a Chinese couple, and from wedding rituals in Nanjing, China, and Peninsular Malaysia, this paper examines the social relation between marriage and houses and the meaning of *hunfang* with ethnographic descriptions and data that were collected through observations conducted in Nanjing, China, in 2010 and Peninsular Malaysia in 2002.

From a cultural perspective, the production of commodities is a cultural and cognitive process; commodities must be not only produced materially as things but also culturally marked as being a certain kind of thing (Kopytoff 1986: 64). A new house or room obtained for a newly wedded couple ventures into a new phase of the relationships with the couple; things are not treated as commodities, but as something culturally shaped with people's stories. This paper concludes that a space meant for a newly wedded couple is an active actor that crafts social relations, especially for the bride. Once experienced by the bride's body, the modern living space becomes more than a static material thing.

The house also becomes a significant material thing upon marriage. In a traditional Chinese family, young women are marginal outsiders; they have only a temporal position, as daughters marry out and new daughters-in-law enter the domestic group under the rules of patrilineal exogamy and patrilocal residency. Brides, who are considered unstable outsiders, become firmly anchored in their new places (*hunfang*) by experiencing the spaces via their lived bodies.